

P-079

在宅重症児の学童期きょうだい支援
プログラム-オンラインと対面を併用
したプログラムの実施-古屋 悦世、岡 澄子、辻 佐恵子、辻 朋子
北里大学看護学部

【目的】

医療の高度化に伴い医療的ケアのある在宅重症児は増加傾向にある。親の介護負担は大きく共に生活をする兄弟姉妹（以下、きょうだいとする）への影響がある。2021年より重症児をもつ学童期きょうだいの仲間づくりを目的にしたきょうだい支援プログラム（以下、プログラムと称す）をオンラインで実施した結果、オンラインだけでなく対面開催のニーズが明らかになった。本研究目的は、オンラインと対面を併用したプログラムの実施と検討である。

【方法】

対象：18歳までの重症児がいる8～12歳のきょうだいとその親。応募方法：重症児が利用する施設からチラシを配布した。期間：2023年11月～2024年1月。内容：北米を中心に実践されているSibshops（Meyer,D.2007）を参考に2021年に作成したものを用いた。遊び、制作、テーマトークを組み合わせ、月1回、計3回構成で、オンライン（1,2回目）と対面（3回目）で実施した。プログラム前後に、きょうだいと親に、QOL尺度、各回終了時に自作のアンケート、プログラム終了後にインタビューをおこなった。倫理的配慮：所属機関の倫理委員会の承認を得た。分析：QOL尺度、アンケートは単純集計し、きょうだいを対象にしたインタビュー内容をまとめた。

【結果】

きょうだいの参加人数は計8名（小学3年2名、4年2名、5年3名、6年1名、女児6名、男児2名）であった。重症児の医療的ケアは呼吸器や経管栄養などであった。プログラム参加前/後のQOL尺度の総得点平均は、きょうだい75.9/77.4、親72.7/74.5であった。きょうだい用アンケートでは、各項目得点の平均は4.7/5で、高得点であったのが「参加してよかった」、「次も参加したい」であった。きょうだいへのインタビューから、対面での交流はオンラインよりも楽しかった、会えてよかったという意見の一方で、オンラインでも他のきょうだいのことを知れた、遠いので対面での参加は難しい、来るのが大変といった意見があった。

【考察】

オンラインと対面を併用したプログラムは、学童期のきょうだいが仲間の存在を知り、交流を図ることができ、楽しいと感じ、今後も継続した参加につながるといえる。本研究はJSPS科研費18K10445の助成で行った。

P-080

小児退院支援の教育への効果

福村 忍、石田 航平、山本 晃代、津川 毅
札幌医科大学小児科

【はじめに】

臨床実習で大病院急性医療を見慣れている医学生にとって、地域在宅医療は異質のものと考えがちであり、特に専門医志向の学生にとっては、敬遠される可能性がある。しかし小児の総合医である小児科医にとって、たとえ大病院急性医療であっても、家族支援、地域でのサポート、小児保健や教育機関との関わりは必要なものである。本研究の目的は、医学生に退院支援の実習を行い、その理解度および意識の変化を調べることである。

【方法】

2016年～2022年の7年間、毎年医学部3-5年生合計139人を対象に小児の退院支援の参加型実習を行った。各チーム3-6人の60分間であった。急性脳症後に重度後遺症を残した9歳女児の退院に際し、退院支援内容を一人ずつ答えてもらう形とし、教員が最後に総評を兼ねたまとめの講義を10分行った。理解度を講義前、講義後のそれぞれについて、5段階のリッカートスケール（1：わからない～5：よくわかった）および自由記載で無記名回答を求めた。統計解析処理は、Wilcoxonの符号付順位検定を行い、p値が0.01未満を統計的に有意とした。

【結果】

講義前に比べ、講義後には小児の退院支援、地域医療、小児保健、教育、社会福祉制度に対する理解度が上昇し、その程度は統計的にも有意（ $p<0.01$ ）であった。自由記載では、これまで慢性期医療のことを実習形式で学んだことがなく新鮮であった、社会福祉の理解が深まった、地域医療と大病院医療のつながりがわかるようになり慢性医療に興味を持てるようになった、という意識の変化がみられた。7年間継続して調査しているが、上記の有効性、意識の変化に、年による差は認めなかった。

【考察】

医学生は、小児の退院支援により多職種の役割と協働作業、退院後の生活の実際（もの、場所、注意点）、小児保健、社会福祉制度、訪問医療、教育との連携、家族の役割や心配を総合的に学ぶことができた。小児退院支援は、小児の総合医療に対する理解と興味を向上させる有効な教育題材であると思われた。